

『就実論叢』第51号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2022年2月28日 発行

# わが国の知的障害者の創作活動と アール・ブリュットに関する考察

**Consider whether the art creation activities of people with intellectual  
disabilities in Japan can be called "Art Brut"**

土 田 耕 司

# わが国の知的障害者の創作活動と アール・ブリュットに関する考察

Consider whether the art creation activities of people with intellectual disabilities in  
Japan can be called "Art Brut"

土 田 耕 司 (幼児教育学科)  
TODA Koji

キーワード：障害者アート、アール・ブリュット、ボーダレス・アートミュージアム  
NO-MA、アール・ブリュット・ジャポネ展

## 1. はじめに (問題の所在)

わが国では知的障害者の創作作品を、正規の専門的な美術教育を受けていない人たちによる芸術としてアール・ブリュットであるとか、美術に関する教育を受けていない独学者として既成概念にとらわれず自由に表現するアウトサイダー・アートという名称であたかも美術の新しい領域として特別視しているように感じられる。

知的障害者の創作作品の中には、その特異的な感性からなのかは定かではないが、それを鑑賞した人々に斬新な衝撃と感動を与え、美術作品として高い評価を得ている作品に出会うことも事実である。これらのような知的障害者の創作作品は、近年に起こったことではなく、アール・ブリュットとかアウトサイダー・アートという言葉が存在しなかった時代でも同じことで、以前から知的障害者によってその異才を放ち創作された作品に少なからず出会うことも事実である。

そこで本論文では、以下のことに関して検証をする。最初に、わが国の知的障害者によって制作された創作作品などに用いられている名称について整理したい。次に、アール・ブリュットの名称が知的障害者のアートに関して注目され多く用いられていることについて、その背景と経緯を整理し明らかにしたい。最後に、わが国の知的障害者による創作作品とその創作活動に関する意義と方向性について考察を深め検討を持ちたい。

## 2. 障害者アートの名称

障害者のアートについては、創作活動もその作品についても定まった名称があるとはいえない。そもそも、障害がある人たちが創作する芸術作品を一括りにした名称を用いて特別視する必要があるのか疑問がある。

そこで、今日の障害者の創作活動や創作作品、つまり障害者アートをさして用いられて

いる名称について、主に用いられているアール・ブリュットやアウトサイダー・アート、エイブル・アート、ボーダレス・アートについて整理しておくこととする。

#### 1) アール・ブリュットとアウトサイダー・アート

障害者の創作作品で最もよく用いられる名称としては、アール・ブリュットとアウトサイダー・アートがあげられる。フランスの画家ジャン・デュビュッフエ (Jean Dubuffet 1901-1985) によって「加工されていない生(き)の芸術」を意味するのアール・ブリュットが提唱された。それをイギリスの批評家ロジャー・カーディナル (Roger Cardinal 1940-) がアウトサイダー・アートという言葉で英訳した。どちらも広義では専門的な美術教育を受けていない独学者が自発的に創作した作品の数々をさしている。<sup>1)</sup>

これらを識別するならば、アール・ブリュットはデュビュッフエが精神障害のある人や幻視家などが制作した絵画や彫刻をさして呼び、それらの美術教育を受けていない人々の作品を「もっとも純粹で、もっとも無垢な芸術であり、作り手の発想の力のみが生み出すもの」であると高く評価している。<sup>2)</sup>

一方、アウトサイダー・アートとは、「既存の美術制度の外側にあって、しかも自らの行為をアートと認識することのない者によって営まれる美術活動、もしくはその活動の結果生まれた作品の総称」であり、美術教育を受けていない独学者や子ども、精神病者らの作品が含まれるのをはじめ、場合によっては非西洋圏の民族美術もこの範囲に含められて考えられることがある<sup>3)</sup>。

アール・ブリュットとアウトサイダー・アートには、共通する概念も多いが、美術界では、必ずしも同一ではないとされている。ただしアール・ブリュットもアウトサイダー・アートも作品を評価する概念として捉えることができる。障害者の創作作品を対象としたものではなく、これらの概念から解釈すると障害者の創作作品もその範疇に大方が含まれるものと解釈することはできる。

障害者の創作作品を想定してアール・ブリュットもアウトサイダー・アートも生まれた名称ではないし、障害者アートを表す名称でもない。このことに関しては、わが国にアール・ブリュットとアウトサイダー・アートを広めた一人である服部<sup>4)</sup>が、アール・ブリュットは作品の質を判断する一つの基準であって、障害者アート全般を指す言葉ではなく、むしろ障害者アートという枠組みを破壊するツールであったと指摘している。また、アウトサイダー・アートに関しても服部<sup>5)</sup>は、アウトサイダー・アートは否定的で差別的な意味をもつ言葉ではなく、それらの作品を積極的に評価するものである。そして、アウトサイダー・アートは、障害のある人が制作した作品という意味の言葉ではないと述べている。ここで、はっきりと押さえておかねばならないことは、アール・ブリュットもアウトサイダー・アートも、障害者アートとイコールではないということである。これらの名称は、美術作品を評価する概念と捉えることができる。このことは、小出<sup>6)</sup>がアール・ブリュットは、印象派や象徴派、表現主義のような絵画の「流派」ではなく、あくまでも考察の手

がかりとなる「概念」であると述べていることから理解できる。

## 2) エイブル・アートとボーダレス・アート

わが国で特有の障害者たちの芸術に関してよく用いられている名称として、エイブル・アートとボーダレス・アートがある。

エイブル・アートは、奈良市で肢体不自由の障害者の支援のために起こった財団法人たんぽぽの家の理事長である播磨靖夫（1942-）が中心となり、1995年に日本障害者芸術文化協会（その後に発展解消し「エイブル・アート・ジャパン」という組織へ引き継がれている）が誕生し、そこで播磨が、障害者芸術が障害のない人の芸術よりも下に見られる状況に疑問を持ちエイブル・アートという語を提唱した。これは「Able Art（＝可能性の芸術）」という造語を当てたもので、新しい視座で「障害者アート」を見直す作業であり、エイブル・アートは芸術運動であると唱えている<sup>7)</sup>。その活動として、数多くの展覧会などを開催し障害者の創作作品を紹介している。

エイブル・アートという言葉について、その提唱者である播磨<sup>8)</sup>は、社会的に価値が低められている人たちの持つ能力を高めると同時に、社会的イメージを高めようということでエイブル・アート＝障害者アートという括りではなく、社会全体の意識とか価値観を変えていく目的でアートは出発し、新しい価値観を作り出すと活動と述べている。

つまり、エイブル・アートは障害者アートをさしているのではなく、その根底は社会運動があり、障害者アートは社会変革運動の手段の一つであったのではないかと考えられる。これは、1950年代に北欧のデンマークでニルス・エリク・バンク・ミケルセン（N.E.Bank-Mikkelsen 1919-1990）によって最初に唱えられたノーマライゼーション理念<sup>9)</sup>・<sup>注1)</sup>と同じ想いを相通ずることができる。

次に、ボーダレス・アートとは、2004年に社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団<sup>注2)</sup>によって2004年に、障害者による美術作品の展示を目的で日本初の美術館である「ボーダレス・アートギャラリー NO-MA（現・ボーダレス・アートミュージアム NO-MA）」<sup>注3)</sup>が開館された。この美術館では、多くの障害者の創作活動によって生まれた作品と一般のプロのアーティストの作品とを並列で展示することで「障害者と健常者」をはじめとするさまざまなボーダー（境界）を超えていく実践を試みている。この「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」のアート・ディレクターをしていたアール・ブリュットにも精通していた絵本作家のはたよしこ（1949-）によって、ボーダレス・アートの名称が用いられた<sup>10)</sup>。このボーダレス・アートのボーダレス（境界をなくす）にも、先に触れた障害のある人が障害のない人と同等に生活し活動できる社会を目指すノーマライゼーション理念に相通ずるものである。

ここで整理しておかなければならないことは、エイブル・アートもボーダレス・アートも障害者の創作活動や障害者の創作作品をさしている名称ではないということである。

### 3) 障害者アートをさす名称

ここまで、一般に使われているアール・ブリュットやアウトサイダー・アート、エイブル・アート、ボーダレス・アートは決して障害者アートをさした名称ではない。アール・ブリュットやアウトサイダー・アートは、美術界から起こった言葉であり、エイブル・アートとボーダレス・アートは、福祉の現場から起こったわが国で生まれた言葉である。これらは、障害者アートの中で用いられることはできるが、障害者アートと決ってイコールではない。

このことについては、厚生労働省と文部科学省が「障害者アート推進のための懇談会(報告書)」<sup>11)</sup>で、障害のある人が想像するアートについては、日本において定着した名称がないのが現状である。本懇談会においても、その概念・名称・定義についてさまざまな意見が交わされたが、特に厳密な定義はせずに、「障害者アート」という名称を用いていくこととすると、述べていることから何うことができる。

これらの名称は、明確に障害者アートそのものに限定された言葉ではなく、概念として用いられていたり、思想を裏付ける手段として用いられていたりしており、実に曖昧で広義に解釈することが可能である。それゆえに、言葉自体が本来の意図するところから離れた方向に行ってしまうのではないかと心配されてならない。さらに、創作作品の商品としての価値を付けることに使われたりしていないか危惧もされる。

このことを、アール・ブリュットの提唱者であるジャン・デュビュッフエが生前、「アール・ブリュット」の呼称を自らのコレクションだけに限定し、商標や統制銘柄のように厳しく管理していた<sup>12)</sup>ということからも納得できるだろう。

## 3. 知的障害者の創作活動と作品

わが国の多くの人々は、障害者とくに知的障害者の中には奇才な才能と個性観のある独特の表現能力を持っている者が存在することを知っていた。それは、「放浪の天才画家」とか「日本のゴッホ」と称された画家の山下清<sup>13・14)</sup>(1922-1971)の存在と知名度が大きかったといっても過言ではないだろう。<sup>注4)</sup>

戦前の昭和10年代に、知的障害児養護施設八幡学園の子どもたちの作品を「特異児童」の作品として世に問う展覧会「特異児童作品展」が開催されている。この展覧会の中心的テーマに障害者の「能力」への関心が、社会一般に定着していた「天才狂人説」や、「狂人の絵画」といった通俗の好奇心を継承し土台としていたと考えられている<sup>15)</sup>。

戦後になると、知的障害者を支援する施設などでも、この能力を認め能力を引き出すことを実践していた。特に滋賀県では、有名な知的障害児の教育を行う近江学園を創設した糸賀一雄(1914-1968)の同志であった田村一二(1909-1995)が、近江学園や自身の創設した知的障害者施設の一麦寮で粘土を使った造形活動を行っており、田村は遊ぶ中で学ぶと

いうプロセスに意味を見出し、表現する中で子どもたちの価値判断を重視するという造形理念を持っていた<sup>16)</sup>。このことから、知的障害者の内に秘めた能力を認め引き出す方法を確信していたのではないかと推測できる。知的障害の子どもたちの自発性を認め彼らの中に無尽蔵の可能性を信じ行った粘土による創作活動が1965年から始められ、1年も経たずに展示即売会を有名百貨店で開催され展示会は盛況で、来会者はこの世に初めて出現したような作品に衝撃を受けたといい、エネルギーを感じるなどと高く評価を受けている<sup>17)</sup>。

知的障害者の作品の理解と知識、さらには支援の方法と人材育成の基盤が滋賀県に根付いていたのではないかと感じられる。このことを成田<sup>18)</sup>が、滋賀県には「糸賀一雄→田村一二→」の流れがあり、後継者養成を重視していたと述べている。ここで、先に触れた2004年に滋賀県で開業された日本初の障害者アートの美術館である「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」の存在も、これまでに滋賀県で実践されていた知的障害者の創作活動の一連の流れに繋がってくる。

#### 4. 障害者アートの社会的背景

わが国で知的障害者アートが社会的に注目を集め、国を挙げて支援が行われたのは2000年代に入ってからであると考えられる。

2007年には文部科学省・厚生労働省による「障害者アート推進のための懇談会」が開催され、とりわけ美術を中心に推進されている。その後、2013年には、文化庁・厚生労働省による「障害者の芸術活動への支援を推進するための懇談会」が開催され、そこで障害者の芸術活動の支援をより一層の推進をしていくために「裾野を広げる」という視点と、「優れた才能を伸ばす」という視点を踏まえた仕組み作りを行うことが支援の方向性として重要であると述べられている<sup>11)</sup>。この懇談会を受け、『障害者による文化芸術活動の推進に関する法律』が2018年施行された。この法律は、障害者による文化芸術活動の推進に関し、基本理念、基本計画の策定その他の基本となる事項を定めることにより、障害者による文化芸術活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進し、もって文化芸術活動を通じた障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ることを目的として、障害者の文化芸術の鑑賞・創造の拡大、作品を発表する機会の増加、芸術上価値が高い作品の保護や評価などを具体的な取り組みとしている。

さらに、「2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けた障害者の芸術文化振興に関する懇談会」が2015年に設置され、スポーツの祭典と同時にわが国の文化を発信するための一環として、障害者の芸術文化を振興していくための具体的な取り組みが検討されている。このことから、障害者アートを支援する動きは、行政が意図的に主導している背景が窺える。

次に、民間の取り組みとして特に注目されるのは、福祉という分野に留まることなく多



様な方々との協働やそこから生み出される文化的な手法によって新しい価値観の創造に努め<sup>19)</sup>、2004年に開業された「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」と、その運営に携わっていた北岡賢剛 (1958-) とその賛同者たちの功績をなくしては語れないだろう。北岡<sup>20)</sup> は、滋賀県では、近江学園の創設 (1946年) 以来、多くの施設で陶芸を中心とした造形活動に熱心に取り組んできた歴史があり、これらの作品群の中にアール・ブリュットと呼ばれた作品が多く含まれていたであろうと述べている。

知的障害者の作品に理解と知識があり、熱心に造形活動に取り組んでいた滋賀県で障害者の福祉に長く携わっていた北岡は、多くの作品に出会い、また創作活動の支援にも携わっていた過程で美術界の評価概念としてのアール・ブリュットとして世界的に認められる作品が存在するを知っていたと考えることができる。

これらの背景から、北岡は「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」とその関係者たちと、スイスのローザンヌ市の世界最大級の障害者アートのコレクション「アール・ブリュット・コレクション」との連携事業の一環として2006年～2008年開催された企画展「JAPON」の成功を受けて、2010年2月～2011年1月にパリ市立美術館「HALLE SAINT PIERRE (アル・サンピエール)」にて日本の63名の作家による大規模企画展「アール・ブリュット・ジャポネ展」が開催され12万人を超える来場者を魅了した<sup>21)</sup>。その後、日本各地で「アール・ブリュット・ジャポネ展」の日本凱旋展覧会を開催としている。

パリ市立美術館で開催された「アール・ブリュット・ジャポネ展」から一連の流れを受け、障害者アートは特にその中でも知的障害者による知的障害者アートが、今まで以上にわが国で評価され、興味が持たれることとなっていった。また、障害者アートに対してアール・ブリュットやアウトサイダー・アート、エイブル・アート、ボーダレス・アートとさまざまな名称を用いられていたのが、「アール・ブリュット・ジャポネ展」からマスメディアなどから「アール・ブリュット」という言葉が一般的に用いられ浸透していったといえる。

## 5. おわりに (まとめとして)

障害者アートには、アール・ブリュットやアウトサイダー・アート、エイブル・アート、ボーダレス・アートとさまざまな名称が用いられている。アール・ブリュットやアウトサイダー・アートは美術界から起こった言葉で、専門的な美術教育を受けていない者が自発的に創作した作品の数々をさしているが、実際には美術作品を評価する概念と捉えることができる。また、エイブル・アートとボーダレス・アートは、わが国で生まれた福祉界から起こった言葉で、その根底には社会に障害者の問題を問いかけるノーマライゼーション理念が見てくる。確実にいえることは、これらの名称は、障害者アートとイコールではないということである。

わが国の障害者アートは2010年にパリ市立美術館で開催された大規模企画展「アール・

ブリュット・ジャポネ展」の存在と、その原動力となった滋賀県の、「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」とその関係者たちが果たした役割は大きかった。その後、あたかもアール・ブリュットという言葉が障害者アートを現す言葉のように使われ出した。

このことに関して、「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」とその関係者たちが反論もせずにいることは、障害のある人びとの芸術活動を進めるにあたって美術界の言説を逆手にとって利用することで自らの目的を達成しようしている<sup>22)</sup>と考えると納得できる。それは、「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」の中心的人物でもあった北岡<sup>23)</sup>によれば、「わが国のアール・ブリュットは日本の障害者が豊かになったらいいと思って始めた。」といており、アール・ブリュットとは北岡にとって、社会福祉に携わる者としてその目的のための手段の一つであったと考えられる。

今日のわが国では、僅か10年足らずの間に障害者アートをアール・ブリュットとして認知させ市民権を得た。その背景には、大衆的ドラマのモデルとなった山下清画伯の存在があったこと。滋賀県をはじめとして各地で糸賀一雄や田村一二らによって知的障害者の創作活動が根強く行われていたこと。知的障害者の創作活動から生まれた作品の中に、美術評価としてのアール・ブリュット作品が少なからずあることを知っていた者、それに光を当てたいと望んでいた者がいたこと。これらのことが相まって、わが国の知的障害者の創作活動とその作品に漠然とアール・ブリュットの名称が使われだしたのではないかと考えられる。

純粋な障害者福祉の実践現場から起こったといっても過言ではないわが国のアール・ブリュットは、この行動を起こした人たちの最初の志から少し離れてだしているのではないかと心配もされる。このことを、わが国のアール・ブリュットの出発といってもよい滋賀県で糸賀一雄、田村一二の流れを継承し、知的障害者の創作活動を実践してきた吉永太市<sup>24)</sup>(1931-)は、アール・ブリュットという耳障りの良い言葉を用いて障害者の造形作品を選別し、作品を売買することが盛んにおこなわれているのではないかと、このことは障害児(者)の創作の機会が脅かされると警告をしている。

**謝辞** 本研究は JSPS 科研費 JP20K00264k の助成を受けたものである。本研究にあたり協力を受けた知的障害者アートの関係の方に、記して感謝の意を表する。

注1) ノーマライゼーションとは、「障害のある人が障害のない人と同等に生活し、ともにいきいきと活動できる社会を目指す」という理念である。デンマークのニルス・エリク・パンク・ミケルセンによって最初に提唱され、その後スウェーデンのベンクト・ニリイエ、北米のヴォルフ・ヴォルフフェンスベルガーらによって具現化されていった。この理念は、多方面に大きな影響を与え、今日の障害者福祉のみならず社会福祉の根底をなす考え方として世界中で広く理解されている。

注2) 社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団は、1967年に滋賀県の外郭団体として県民の福祉の



増進に寄与することを目的とし多くの県立の社会福祉施設の受託運営を担っていた。滋賀県から支援を終わらせ他法人との合併し社会福祉法人グローとして2014年出発した。社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団時代の2004年に、ボーダレス・アートギャラリー NO-MA を開設し社会福祉法人グロー引き継がれ、わが国の障害者アートの発信を続けている。

- 注3) 滋賀県近江八幡市の重要伝統的建造物群保存地区八幡地区ある昭和初期に建てられた町屋、旧野間邸を展示施設に改築して作られた。この「野間」邸から「NO-MA」を用いて、ボーダレス・アートギャラリー NO-MA として開館された。現在のボーダレス・アートミュージアム NO-MA に2007年に改称した。
- 注4) 山下清という実在の人物をモデルに、有名な喜劇役者の芦屋雁之助が主役の山下清を演じたフィクションドラマ『裸の大將放浪記』（のちに『裸の大將』）。1980年から1997年の18年間、日曜日の午後9時にシリーズ化され83回放映された国民的ドラマといっても過言ではないだろう。その後、幾度も再放送がされている。2007年から出演者が変わり制作され再びテレビ放映されている。また、映画も数作制作され配信されている。

## 引用参考文献

- 1) 嘉納礼奈、『アール・ブリュット アート 日本』保坂健二郎監修，平凡社，pp56-75，2013
- 2) DNP Museum Information Japan ホームページ  
[https://artscape.jp/artscape/reference/artwords/a\\_j/art\\_brut.html](https://artscape.jp/artscape/reference/artwords/a_j/art_brut.html)（2021.10.18 閲覧）
- 3) DNP Museum Information Japan ホームページ  
[https://artscape.jp/artscape/reference/artwords/k\\_t/outsider\\_art.html](https://artscape.jp/artscape/reference/artwords/k_t/outsider_art.html)  
（2021.10.18 閲覧）
- 4) 服部正，障がい者アートとしての和製アール・ブリュット，民族藝術 Vol. 34，pp101-107，2018
- 5) 服部正，『アウトサイダー・アート：現代美術が忘れた「芸術」』，光文社新書，p16，2003
- 6) Bruno Decharme・小出由紀子対談，語りつくそう、アール・ブリュットのすべてを！，芸術新潮2005年11月号，新潮社，pp46-51，2005
- 7) 一般財団法人たんぽぽの家 ホームページ  
<http://tanpoponoye.org/foundation/>（2021.10.18 閲覧）
- 8) 播磨靖夫・織田信生対談，アートを通して新しい価値観・人間観をつくっていく，季刊地域精神保健福祉情報 No.41，pp23-27，2002
- 9) 中園康夫，『ノーマリゼーション原理の研究』，海声社，1996
- 10) 『ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 10年の軌跡 ―境界から立ち上がる福祉とアーター』，社会福祉法人グロー，2014
- 11) 障害者アート推進のための懇談会，『障害者アート推進の懇談会～ぬくもりのある日本、みんなが隠れた才能をもっている～』，2008
- 12) 嘉納礼奈，『アール・ブリュット アート 日本』保坂健二郎監修，平凡社，p58，2013

- 13) 鈴木七沖・高関進,『山下清のすべて』, サンマーク出版, 2000
- 14) 山下清・榎木野衣,『山下清作品集』, 河出書房新社, 2012
- 15) 大内郁, 昭和10年代「特異児童作品展」と同時代の「能力」言説－試論, 千葉大学人文社会科学研究 No.21, pp62-74, 2010
- 16) 前田洋和・新開伸也, 障害者福祉における田村一二の造形教育の理念:「過程の意義」に着目して, 美術教育2019(303), pp8-15, 2019
- 17) 吉永太市, 田村一二と一麦寮における粘土による造形の実践, ノーマライゼーション: 障害者の福祉 33(11), pp46-48, 2013
- 18) 成田孝,『障がい者アート－「展示会」と「創作活動」の在り方－』, 大学教育出版, p200, 2019
- 19)『ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 10年の軌跡－境界から立ち上がる福祉とアート－』, 社会福祉法人グロー, 2014
- 20) 北岡賢剛, 「障害」がもつ「豊かさ」を発信しよう!, ノーマライゼーション: 障害者の福祉 34(1), pp46-48, 2014
- 21) ART BRUT JAPONAIS ホームページ  
<http://www.art-brut.jp/download.html> (2021.10.23 閲覧)
- 22) 中谷和人, 「アール・ブリュット / アウトサイダー・アート」をこえて－現代日本における障害のある人びとの芸術活動から－, 文化人類74(2), pp 215-237, 2009
- 23) 北岡賢剛・岡山慶子対談, アール・ブリュットは美術界に刺激を与え, 福祉に新しい風を起こした, 社会保険 70(11), pp25-27, 2019
- 24) 吉永太市,『知的障害児(者)の造形活動』, 田村一二記念館, 2020

